



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 5 月 17 日(土)

発行 館長 加藤 智 一

青森発ビーガンレザー

2025. 5. 14 日刊工業新聞



「ビーガンレザー」は、植物由来の素材を利用したレザーです。動物皮に似せた見た目や肌触りで環境に配慮された素材が特徴的です。動物搾取をしないビーガンの視点で製造された商品は、サステナブルな取り組みとして今注目が高まっています。バナナ、マンゴー由来の「ビーガンレザー」はすでに世界的にも有名になりましたが、今では技術の進歩により、質感や見た目も向上し、天然レザー独特の柔らかさや風合いをも完全に再現していると言っても過言ではない!? 製品も数多く出回るようになりました。とは言っても、レザーの経年変化を楽しみたいという人にとっては、物足りなく感じることもあるかもしれませんが? 日本では、リンゴを利用した「ビーガンレザー」について、すでに「R E R I G O(レリゴ)」HP:<https://rerigo.jp/> というブランドが、長野産のリンゴジュースやシードルを作る過程で取れる搾りかすを原材料として商品化しており、バッグや財布などのアイテムを製造しています。

となれば、国産リンゴの生産量(収穫量)1位、年間生産量は409,800 tで、全国シェア58.4%の青森県が黙って見ているはずがない。というわけでもないのですが、日刊工業新聞によると、青森市のapccycleは、青森県弘前市内を走る循環電気自動車(EV)バスの座席シートカバーに自社で開発した、廃棄されるリンゴが原料で、アップサイクル*技術を活用した合成皮革(ビーガンレザー)が採用されることになりました。今回採用されたのは、弘前市内循環EVバス1台の全座席(19席)で、設置期間は、2030年3月31日まで。Apccycleは、2024年11月に弘前市と「地域活力創造に向けた包括連携協定」を締結しており、今回はその一環となります。地域資源の循環利用と環境負荷低減を両立する社会実証の実例にもなるとのこと。Apccycleが開発した「ビーガンレザー」は、青森県の廃棄リンゴや搾りかすな

どを原料とした環境配慮型の「国産ビーガンレザー」。原料の72%が廃棄物をアップサイクル*したもので構成されているそうです。

※アップサイクルとは、リサイクルとは異なり、元の製品として「素材」をそのまま活かす手法です。リサイクルではエネルギーが使用されるのに対し、アップサイクルではそのままの形をなるべく生かすため、地球への負荷を抑えることができます。アップサイクルの例としては、余った生地や繊維くずを用いて、衣服や靴、鞆などの製品を作り、廃棄を削減する手法があります。アップサイクルは、製品を原料に戻す際にエネルギーを必要とするリサイクルより、さらに持続可能な再利用の手法と言えるでしょう。



カレーライス物価指数

帝国データバンク、2025. 5. 14 日刊工業新聞

帝国データバンクは、食卓への影響度を示す「カレーライス物価指数」を独自に試算しています。2024年度平均で1食当り365円(前年309円)となりました。56円の上昇は過去10年で最高値です。月別でみると、2025年3月は1食あたり421円で、12ヶ月連続の上昇。4月は425円とさらに上昇の見込みとか。積算の根拠となるカレー調理のシーンは、6食分(市販のカレールー1/2パック)をまとめて調理し、原材料はニンジン、ジャガイモ、玉ねぎ、牛肉(輸入)、米、食用油で、熱源はガス、そして水道水を利用します。なお洗浄にかかる水量は考慮していないそうです。この写真をみよ!! コンビニカレーは税込み328円也。こっちの方が安いではないか。しかも結構旨いし、時間が経てば100円引きになります。

